

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：14403

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00628

研究課題名（和文）ポストモダンと呼ばれる時代のテレビ番組における方言の表象に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Representation of Regional Dialects in Television Programs of the Postmodern Era

研究代表者

櫛引 祐希子（Kushibiki, Yukiko）

大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：10609233

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では1980年代から2000年代に制作された複数のテレビ番組を調査した。日本の方言を題材にしたテレビ番組は、テレビが大衆メディアの主役であった20世紀の終わりにおいて、当時の方言の社会的位置づけだけでなく、人々の抱く方言に対する価値観などを映し出してきた。1980年代以降、方言に対する社会的評価は高まったとされる。だが、テレビ番組における方言のありようは、一元的な評価におさまるものではない。失われゆく伝統的な文化の中で継承が望まれる文化の一つとして描かれる場合がある一方で、後進的な地域社会の象徴や奇抜なサブカルチャーの代弁者として描く番組も少なくない。

研究成果の学術的意義や社会的意義

方言を題材としたテレビ番組を1980年代以降の社会的文脈の中で問い直すことで、方言を肯定的に捉えた番組においても、方言のネガティブなステレオタイプに縛られている側面が少なからずあり、従来の研究で指摘されてきたポストモダンと呼ばれる時代の方言の社会的評価の高まりは決して一様ではないことが確認できた。

また、方言を題材にしたテレビ番組は、方言に対するイメージを再生産する装置であると共に、視聴者と同じ目線から方言に対する気づきを促す装置としての役割も担っていたことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）： This study investigated several programs produced from the 1980s to the 2000s. At the end of the 20th century, when television dominated popular media, programs featuring Japanese dialects reflected not only the social status of regional dialects but also the values of that era.

It is said that social appreciation for regional dialects has increased since the 1980s. However, the portrayal of these dialects in television programs cannot be evaluated simplistically. Some depict regional dialects as a traditional culture to be preserved for the future, while others portray them as symbols of underdeveloped regions or examples of eccentric subcultures.

研究分野：日本語学

キーワード：方言 テレビ番組 表象

1. 研究開始当初の背景

テレビ番組の影響により、方言に代表される多様な地域文化を擁していた日本社会が均質化したという見方がある。例えば中野収(1981: 120-121)は「日本のローカルなものを破壊、崩壊させた元凶は放送である」とし、ラジオが共通語を徹底させ、テレビの開局がそれに拍車をかけて方言の崩壊を引き起こし、地域独特の生活様式の崩壊につながったと指摘する。しかし、中野の論考が収められた放送文化基金編(1981)『地方の時代と放送』を見ると、テレビ番組が従来知られてこなかった地域文化や地域社会への問題を集めると主張する意見も少なくない。

このように1980年代はテレビ番組と方言の関係性について異なる立場の議論が活発化するようになり、方言学的にも方言に対する認識の変遷が大きく変わった時代とされている。

陣内正敬(2007)は、1980年代を、共通語と方言の使い分けの時代から若い世代を中心に方言の方策的な使用や自己表現としての使用が見られるようになる時代への転換期であると位置づけた。陣内は、リースマン(1960)が提示した社会的性格の類型化を用い、プレモダン(江戸期)を伝統志向型、モダン(明治期・大正期・昭和期(1980年以前))を内部指向型、ポストモダン(昭和期(1980年代以降)・平成期)を他人指向型に割り当て、「1980年代以降は、非標準の時代(ポストモダン)であり、個性、多様性、非標準が価値を持つ時代となった」とする。

陣内の分析は、方言のありようを撲滅の対象・記述の対象・娯楽の対象として分類した井上史雄(1993)、近世以前・近代・現代・将来という枠組みに方言の使用状況、共通語化の程度、方言の社会的機能といった観点を盛り込み、現代の方言の社会的評価の高まりについて論じた小林隆(1996)の成果を踏まえつつ、そこに社会学の理論を盛り込み、人間の歴史における社会の変容と方言に対する認識の変遷を組み合わせ論じた点が興味深い。

だが、陣内が言うように1980年代以降の人々の方言に対する認識は、それ以前のものから大きく変容したのだろうか。方言に対する認識の変遷を簡潔な図式に収めようとするれば、方言をめぐる人々の複雑な認識の実態は見えにくくなる。熊谷滋子(2013、2018)が指摘するように、テレビ番組や翻訳に利用される東北方言の表象に着目すれば「方言の価値が高まった」という言説は方言の商品価値という点において成立するものであり、依然として共通語中心の日本社会における方言の位置づけは周縁に留まっているとも考えられる。

こうした方言に対する認識の齟齬が研究者の間で拡大していくのも1980年代以降であろう。冒頭で引用した中野の論考が収められた『地方の時代と放送』も、その一例である。とすれば、そもそも1980年代から制作・放送されたテレビ番組は、どのような方言をどのように取り上げていたのだろうか。テレビ番組における方言の表象を通して当時の人々の方言に対する認識を掘り起こすことには、複雑な変遷をたどる日本語の方言認識の歴史の一端を明らかにするという意義がある。

2. 研究の目的

方言という視点から捉え直せば、ポストモダンというのは言語の機能主義に基づく合理化や価値観の共有を志向したモダニズム(近代主義)が終焉し、地域的な言語変種である方言に対する評価やイメージが多様で複雑化した時代である。そうした時代においてマスメディアのなかでも特にテレビ番組は、映像を介して豊富な視覚情報と聴覚情報を大量に発信することで、日本で生活する人々の方言に対する評価やイメージの形成に多大な影響を及ぼした。

テレビ番組内で使用される方言の頻度や題材として取り上げられる方言の種類については時間の経過に応じた変化が予想される。しかし、本研究では、そうした量的変化に着目した分析ではなく、「方言についての番組(方言を題材とした番組)」の内容を番組制作当時の文脈に応じて読み解くこととする。

その際、分析の観点として記号学や言語学の分析手法をテレビ番組の分析に持ち込んだフィスク & ハートレー(1991)を参考にする。フィスク & ハートレーは、「テレビは、社会の表面に顕在的な現実性を表現するのではなく、むしろ表面下の種々の価値観と諸関係の構造を、シンボルを通じて反映している」と言う。ここで言うシンボルとは、基本的には様々な映像表現たとえば「人物が画面に登場した時、胸から顔にかけてのアップなのか全身のショットなのか」「シーンの導入が風景の遠景からなのか近景からなのか」「音楽はどのタイミングで挿入されるのか」を意味する。

本研究も、方言が題材となるテレビ番組において施される演出や編集などにも着目し、テレビ番組が意図して描こうとした方言の表象と、期せずして顕わになった当時の人々の方言観を明らかにすることを目指す。

3. 研究の方法

本研究では、放送ライブラリー(神奈川県横浜市)で公開されている1980年代以降に制作された方言を題材にしたテレビ番組を視聴し分析する。

放送ライブラリーは、公益財団法人放送番組センターが1991年に設立した国内唯一の放送番組専門のアーカイブ施設である。なお、本研究では番組制作にあたる放送界の活況を理解するために、日本の民放およびNHKの活動・放送行政・経営動向・代表的な制作番組をまとめた『日本民間放送年鑑』（1981年から最新刊まで）を基礎的な資料として用いる。

研究は放送ライブラリーで視聴可能なテレビ番組を中心に視聴分析を行う予定であったが、2020年度からは新型コロナウイルス感染拡大防止のため、放送ライブラリーの使用が不可となる事態や本務校の業務との兼ね合いが困難となり、視聴調査の予定を大幅に変更した。

くわえて、視聴調査を開始すると、文字化作業を中心に想定以上に調査時間を要することとなり、研究遂行期間中に十分な視聴調査が行えた番組は42本となった。

また、放送ライブラリーに所蔵されていないものの方言とテレビ番組の関係を知る上で必要となる番組についてはDVDやインターネットの配信を利用して視聴することとした。

4. 研究成果

実施期間を終えた現時点で、視聴調査を終えた番組は42本あるが、ここでは公開した論文を中心に本研究の要であるポストモダン期と方言の関係性について考える上で重要となるテレビ番組の分析結果を報告する。

4.1 1980年代の留学生の地域社会との関わりを表象した方言

ドキュメンタリーとしてのテレビ番組には、放送当時の思想や社会的価値観が反映されているという考えに立ち、「福井のお米で10キロ痩せた タミーの322日」(福井放送、1983年、49分)の分析を通して、当時の在日留学生に対する社会的な認識を明らかにした。番組が描いた在日留学生の姿は、当時の主要な日本語教育観とは異なり、母文化と日本文化の差異を相対化させながら日本での生活に積極的に順応するものであった。そして、その積極性を象徴的に表すのが在日留学生の使う福井方言であった。番組の中で在日留学生が自らの成長を実感できることとして福井方言の習得を挙げているのは、留学の受け入れ先となる地域が在日留学生の成長に及ぼす影響の大きさを物語る。番組のナレーションは、主役であるタミー自身が行っている。

放送に要した時間(約...)	シーケンスのテーマ; 主要な場面		
1分20秒	①来日; 空港での歓迎	ナ レ ー シ ョ ン	
30秒	②ホームステイ先への移動; 特急への乗車		
2分	③ホストファミリーとの対面; ホームステイ先での歓迎		
2分	④全校生徒への自己紹介; 体育館での挨拶		
1分	⑤同級生との対面; 教室での英語による歓迎		
1分20秒	⑥登校; ホストマザーの見送り、自転車での登校		
3分10秒	⑦30キロ強歩大会への参加		
2分	⑧文化祭; 茶道、かき氷、ヨーヨー釣りの体験		
1分	⑨下校; 男子生徒との雪合戦		
8分	⑩熊本への修学旅行; 駅での乗り継ぎ 観光バスでのガイドとの会話、 宿舎での夕食、 観光地での外国人女性2名との遭遇 宿舎での同級生によるタミーへのインタビュー 取材記者による同級生へのインタビュー 観光地での記念写真撮影		
3分30秒	⑪数学・家庭科・体育・書道の授業		ナ レ ー シ ョ ン
4分	⑫弁論大会の準備; 告知、原稿の準備、発表に向けての担任教師との特訓、同級生に向けての発表のリハーサル		
13分30秒	⑬弁論大会; 出場者の様子、タミーの発表、表彰式		
6分	⑭越前海岸での同級生との会話		
20秒	クレジット		

【「福井のお米で10キロ痩せた タミーの322日」の番組構成】

「福井のお米で10キロ痩せた」は、番組内で紹介されるタミーが出演した弁論大会のスピーチのタイトルでもあるが、在日留学生にとっての「日本」が抽象化された国家ではなく、滞在先の地域であることを端的に示している。くわえて、在日留学生の成長は受け入れ先の地域との関係に依拠するという事実を端的に表している。そういう意味でも、弁論の中でタミーが自分のおぼえた福井方言の語彙を列挙した後に「自分の世界が大きくなっていく」と発言したのは重要である。それはタミーが自己の成長を福井での生活の賜物であると認識していることの表明に他ならないからだ。

日本語教育における方言の教育についての議論も1980年代から始まり、教材開発だけでなく日本の文化理解にからめた教育の提案など多岐にわたる議論が展開されてきた。それと並行して在日留学生の方言学習に対する意欲を調査する研究も各地で行われてきた。福井の在日留学生については大学生を対象にした Hennessy & Kuwabara (2015) があり、地域社会に参加したいと願うことが方言を学びたいという意欲の前提条件になるという結論が示されている。

今後も増加する留学生の受け入れにおいてあらためて考えなくてははいけないのは、日本での彼らの成長をどう保障していくかということである。「タミーの322日」は、日本の高校に通った在日留学生を追跡した番組だが、留学先の地域での暮らしを大切にしながら自己のアイデンティティを確立していく在日留学生の成長を描いたという点で、日本国内の各地域でのグローバル化が急激に進む今こそ見るべき方言を題材にしたテレビ番組である。

公開した論文 「1980年代のテレビドキュメンタリーが描いた在日留学生の方言 「福井のお米で10キロ痩せた タミーの322日」(福井放送、1983)の分析」『国語学研究』59; pp.326-340. 査読あり

4.2 ポストモダンと呼ばれる時代におけるテレビ番組の中の東北方言

1987年にNHK仙台放送局が制作・放送した「正しい東北弁話し方講座」(45分)は、共通語にはない方言ならではの表現力を肯定的に評価し、陣内の言う方言に対する認識の転換期に制作された番組として新しい価値観が主流となる時代の気分を捉えている。

	各コーナーのサブタイトル・内容	山田アナウンサー	伊奈かっぺい	ゲスト	観客
約1分20秒	① 放送で使う言葉に関する寸劇				 ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓
約25秒	② タイトルバックと出演者の表示				
約53秒	③ 番組の内容に関する説明				
約6分	④ 一表記できない東北弁の豊かさ一				
約23秒	⑤ 「気仙三十六騎」の表記の紹介				
約13分40秒	⑥ 一ケセン語入門一	↓	↓	山浦玄嗣	
約45秒	⑦ 東北方言の種類について	↓	↓		
約4分30秒	⑧ 一東北弁の履歴書一	↓	↓	加藤正信	
約1分30秒	⑨ 1986年に放送したNHKの番組のVTR				
約20秒	⑩ 歌手相馬里史の紹介				
約3分00秒	⑪ 「夢帰航」(歌唱)			相馬里史	
約9分10秒	⑫ 一おばあちゃんからの贈り物一			長岡輝子	
約2分00秒	⑬ 番組出演の感想		↓		

【「正しい東北弁の話し方講座」の番組構成】

とりわけ進行役と講師役を兼ねる伊奈かっぺい氏は、方言を題材にした番組であるにもかかわらず共通語至上主義的な思考に留まる番組の問題点を開始直後から指摘する批判精神に富んでおり、方言に対する新しい認識を提示する役目を担っている。

とはいえ、実際に伊奈が進行役として番組を展開する際に用いるのは、少し東北方言の音声的特徴を織り交ぜた共通語であり、単純なトリックスターを演じているわけではない。また、番組の最後には自分のルーツとなる東北を意識することの大切さにくわえて共通語と方言の併用を肯定的に捉える発言をする。他の東北出身の出演者も、共通語と方言を相対的に評価することで方言の使用を肯定的に価値づける。

番組は「正しい東北弁」を歴史的正当性のあるものと紹介し、方言の豊かな表現性を讃えながらも、方言の使用は共通語の使用によって決定づけられることを無批判に唱え、方言話者の代表として児童、高齢者、農家など洗練された都会的なイメージからかけ離れた人物を登場させる。1980年代の方言に対する社会的評価の多面性がうかがえる番組である。

4.3 2000年代の教養番組の題材としての方言

教養番組は「国民の一般的教養の向上を直接の目的とする」番組である。何も無いところに新たな知識を提供するのではなく、既に一定の知識があるところに更に知識を提供し高めていくというイメージが、「向上」には反映されている。

この点を「週刊ことばマガジン」(東日本放送、2005年4月2日から2011年3月5日まで放送)に当てはめると、この番組は既に視聴者の中にあつた方言に関する何らかの知識を向上させることを目指したということになる。おそらく、その知識とは、たとえば、かつて祖父母が畑仕事で使っていたとか、商店街でよく耳にしたとか、隣町出身の知人が使っているといった日常生活の経験を通して視聴者が得てきたものだろう。生活に根差したそうした方言に関する知識が、番組を通して日常生活とはかけ離れた古典の世界や言葉の仕組みや、あるいは地域が育んできた伝統的な文化と繋がっていることに気づくというのが「ことばマガジン」の目指した教養の向上の正体だと考えられる。しかし、こうした教養の提供は書籍のような活字メディアでも可能である。

「ことばマガジン」のように方言を主要なテーマにした教養番組が制作された背景には、現代の地域社会から方言が失われつつあるという事情が関係している。とはいうものの、「ことばマガジン」という番組の全体を取り巻く気分は、方言の喪失に伴う重さや深刻さとは無縁である。軽快なテーマ曲が象徴するように、番組の映像を彩るのが、その方言を育んできた地域の人々の活気ある暮らしぶりだからであろう。

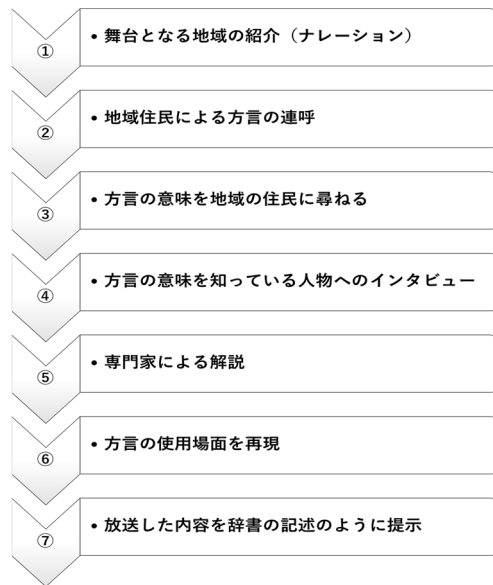
また、番組に登場する住民のインタビューや方言の使用を再現する場面の映像によって、方言が地域社会から完全に喪失したわけではないという事実を伝えたことも、番組が持つポジティブなトーンと無関係ではない。つまり、「ことばマガジン」は、方言の歴史や由来に関する知識を提供しただけでなく、現在の方言が未来に存続しうる余地をまだ辛うじて残しているということも、映像の多様な情報量を最大限に利用して視聴者に伝えた番組であったと言える。

公開した論文 単著

「教養番組が伝えた「方言」の現在 「週刊ことばマガジン」の「あけず」を例に」『大阪教育大学 日本アジア言語文化研究』14:pp.39-64. 査読なし

【引用文献】

- 井上史雄(2007)「方言の経済価値」小林隆・篠崎晃一・大西拓一郎編『方言の現在』明治書院
- 熊谷滋子(2013)「現代の方言は「カッコいい」ものか? : 東北方言からの問い」『市民の科学6: pp.87--98.
- 熊谷滋子(2018)「方言の価値が高まった」という言説を再考する」『静岡大学人文社会科学部 人文論集』68-2:pp.93--126.
- 小林隆(1996)「現代方言の特質」小林隆・篠崎晃一・大西拓一郎編『方言の現在』明治書院
- 陣内正敬(2007)「若者世代の方言使用」小林隆編『シリーズ方言学3 方言の機能』岩波書店
- 中野収(1981). 情報高密度社会におけるローカリズムの可能性 地方の時代と放送 放送文化基金・研究報告から, 放送文化基金
- フィスク, ジョン & ハートレー, ジョン(1978)『テレビを 読む』未来社(訳;池村六郎1991、原著 *Reading Television*.1978)
- 放送文化基金編(1981)『地方の時代と放送』放送文化基金
- リースマン, デイヴィッド(1960)『孤独な群衆』みすず書房(訳;加藤秀俊1964、原著 *The Lonely Crowd*.1960)
- Hennessy, Christopher & Kuwabara, Yoko(2015)A Sense of Inclusiveness Through Japanese Dialect: Preliminary Results of a Pilot Study on Non-Native Japanese Language Speakers' Attitudes Towards Learning the Local Dialect in Fukui City. 『福井大学 国際交流センター紀要』2: pp.23--33.



【「週刊ことばマガジン」の番組構成】

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 榎引祐希子	4. 巻 59
2. 論文標題 1980年代のテレビドキュメンタリーが描いた在日留学生の方言 「福井のお米で10キロ痩せた タミーの322日」（福井放送、1983）の分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『国語学研究』	6. 最初と最後の頁 326-340
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 榎引祐希子	4. 巻 14
2. 論文標題 教養番組が伝えた「方言」の現在 「週刊ことばマガジン」の「あけず」を例にー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『日本アジア言語文化研究』	6. 最初と最後の頁 39-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------